



上手な買物

経済成長にともなって消費生活も大幅に高度化しましたが、省資源の時代を迎え、今まで以上に買物に対する心がけが大切になってきています。

◇限定生活法のすすめ

買物をする場合、生活設計を照らし合わせて本当にその品物が必要か再検討してください。生活収入とともに膨張させることなく、一定の水準で限定して生活することも必要です。まだ資源のムダ使用となるような過剰機能商品（テレビのリモコンスイッチや装飾過多の学習机など）や、使い捨て商品を買わないなど、

量質の両面からブレーキをかけます。

◇買う時の注意

品物の商品知識を日ごろから身につけ、広告やチラシなどの情報を上手に利用しましょう。表示のきまり、マーク、ラベル、製造年月日、包装などをよく確かめること。また、安ければよいというのではなく、値段と品質や性能の関係をよく見きわめてください。

◇買ったものは使いこなす

品物の手入れをよくすることで、使用年数は大きく違います。寿命がのびればその分だけ安く買ったことになり、特に冷蔵庫、ガステーブル、石油ストーブ、換気扇、洗濯機、掃除機などの手入れはまめに。また、買った品物は最大限に利用することも必要で、洋服などは再利用も考えます。せっかく買ったのに使わないままホコリをかぶっていることのないように。
買物の仕方は、その人の生活哲学によって大きく左右されるものです。

民話



カシどんの 西瓜つくりの話

高田素次

カシどんが、五本松の茶店で休んでいると、中原の人が西瓜をになって通りかかったそうです。カシどんが、「その西瓜よばひとつ食わせんかよ」というと、その人は、「どおいおまい、こらア免田まで売りに行くとでござんもすもん」と返事をしたそうです。するとカシどんは、「よかよか、そいじゃ、俺ア自分でひつつくってうち食わう」と言いながら、「こなたもゆくうて行きやい。俺が西瓜もうまかばい」といいながら、道端に落ちていた西瓜の種をひらうと、路上の土を掘ってそれを埋め、茶店の主人に団扇をかりると、「芽エ出る、芽エ出

ろ」と言いながらあおぎはじめたそうです。すると、今そこに埋められた西瓜の種が青い芽を出したそうです。カシどんは、「おうおう、太うなれ太うなれ」と言いながらあおぎつづけたそうです。すると、芽は大きくなって伸びはじめたそうです。

カシどんはいよいよあおぎながら、「のびろのびろ、のびろのびろ、よしよし、花つけ、花つけ」といったそうです。すると、つるは段々のびて、小さな花がついたそうです。

カシどんは「果になれ、果になれ」というと、花は小さな果になったそうです。カシどんは、指先でその果をそととまでながら、「大きくなれ大きくなれ」と言うると、果はみるみるうちに大きく大きくなったそうです。「ようよう大きくなった、うれしうれし」というと、西瓜はいよいよはちぎれるほど色つやもよくなったそうです。カシどんは茶店の主人から切板と庖丁をかりると、「よううれたうれた」と言いながら蔓を切って西瓜を切板の上のせ割ってみると、みごとな真つ赤な西瓜だったそうです。「さあ、こなたも食べやい」とカシどんは茶店の主人にも中原の人にもたべさせ、自分も食べて帰って行ったそうです。



このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

郷愁

日本画家 牛島憲之

牛島憲之さん七十五歳、日本画家。隅田川をモチーフにしたガスタンの詩」として評論家の絶賛をあびている。

「私が隅田川の絵をかくのは、私が坪井川の縁で生れ育ったためでございます。うね、それは、まるで河童みたいなものでございました。その頃への郷愁が私に隅田川をかかせるんです。少年うね」。牛島さんは静かに話す。少年時代から画家を夢み、坂本繁二郎に傾倒、熊中一美校と進む。昭和二年「芝居」（三十号）が帝展に初入選、以来数多くの力作を発表、今日に至る。

昭和五十年勲三等瑞宝章受賞。
現在「立軌会」会員。

住所

東京都世田谷区三十七一七十三

絵との出会

私は明治三十三年、熊本市二本木に生まれました。小学校は古町小学校です。特に腕白という子供ではなかったようです。

私が絵かきになろうと思ったのは小学校三年の頃でございます。私の家の隣にお医者さんがおられましてね、絵を描いたり紙をされたり、写真を撮ったり、それは多趣味な方でございます。その子供が私より一歳年上で、仲が良かったものですから、しょっちゅう遊びに行っていたんです。そこでいろんな事を見て聞いたものですからね、そのうち、絵に興味を覚えたんです。うね、きつと。

そういった、絵との出会いがありました。おりましたね、この人のお父さんは、当時、済々黈の絵の先生でございました。その家に遊びに行っておりました時に、美術雑誌を見せてもらいましたね、その中にとっても素敵な絵があったんです。その絵がどうしても忘れられません。もちろん、それがどなたの絵なのか知らないんですよ。後で坂本繁二郎

坂本画伯

私が熊中の時、親友に青木という人がおりましたね、この人のお父さんは、当時、済々黈の絵の先生でございました。その家に遊びに行っておりました時に、美術雑誌を見せてもらいましたね、その中にとっても素敵な絵があったんです。その絵がどうしても忘れられません。もちろん、それがどなたの絵なのか知らないんですよ。後で坂本繁二郎

